２．国際文化学部・国際文化学研究科

Ⅰ　国際文化学部・国際文化学研究科の研究目的と特徴・２－２
Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定　・・・・・・・・・・・・２－４
分析項目Ⅰ　研究活動の状況　・・・・・・・・・・・・２－４
分析項目Ⅱ　研究成果の状況　・・・・・・・・・・・・２－10
Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・・・・・・・２－11

Ⅰ　国際文化学部・国際文化学研究科の研究目的と特徴

国際文化学部・国際文化学研究科は、変動する世界の文化状況に即応した教育研究体制を構築するために、総合人間科学研究科の教育研究のうち人類文化に関わる２専攻、すなわちコミュニケーション科学専攻と人間文化科学専攻を独立させ、平成 19 年４月に発足した。以下に本学部・研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

（研究目的）

1　本学部・研究科は、現代世界における異文化間の相互作用ならびにグローバル化による文化の変容とコミュニケーションに関わる諸問題を学際的に究明することを教育研究上の目的としている。より具体的な研究目的は次のとおりである。

①文化を複合体として捉え、異文化間の関係性を視座として文化研究を行う。

②複合体としての文化を衝突、融合、交渉などの異文化間の相互作用という視座から、動態的に研究する。

③グローバル化する現代世界の文化変容を多角的に研究する。

④言語や情報に関わる先端的コミュニケーション研究の開発を行う。

⑤中心／周縁、文明／未開、先進／後進などの一元的で単眼的なパラダイムから、多元的で複眼的なパラダイムへのシフトを実現し、現代世界の文化動態に則した研究方法を開拓する。

2　このような研究目的を達成するため、現行の中期目標では、「「研究憲章」に掲げた、既存の学術分野の深化・発展と学際的な文理融合領域の開拓だけでなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う、優れた若手研究者の養成・輩出に努める。そして、それらの卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む。」ことを定めている。

（研究科の組織構成）

上記目的を実現するため、本研究科は、《資料１》のような組織構成をとっている。

《資料１：国際文化学研究科の組織構成》

専　　攻	講　　座
文化相関専攻	地域文化論、異文化コミュニケーション論
グローバル文化専攻	現代文化システム論、言語情報コミュニケーション論、外国語教育論(協力講座)、先端コミュニケーション論(連携講座)

（研究上の特徴）

1　学際的、文理融合的研究

本研究科は、日本を始め、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、北米、中南米、さらに中東地域等、多彩な地域文化研究に加え、グローバル化に伴う現代世界の文化変容を踏まえ、個別文化に通底する現代文化システムの特性とその動態について、最先端の研究領域を開発し、研究成果を蓄積発信している。また、多言語コミュニケーション、IT コミュニケーションの研究者を多数擁し、単に人文科学と社会科学との学際性にとどまらない、自然科学的な視点も取り入れた形で、グローバル化の中の社会・文化問題に取り組んでいる。また、これまでにない新たな研究領域の開発にも積極的に取り組んでおり、たとえば宇宙

航空研究開発機構（JAXA）との連携による「宇宙文化学」という文理融合的で斬新な学問領域の開拓も鋭意継続中である。

２　国際文化学研究推進センターとの連携

平成 26 年度、本研究科はそれまで附設されていた「異文化研究交流センター」と「メディア文化研究センター」を統合発展させ、「国際文化学研究推進センター」(Promis)を設立した。本センターの目的は、両センターのこれまでの成果と経験を踏まえつつ、時代の動向・要請に一層迅速かつ機動的に対応して先端的な研究を行うことにある。本センターは、研究開発部門、連携事業部門、国際交流部門の三つの部門から成り、国の内外の研究者と連携した様々な研究プロジェクトの開発と促進、ならびに若手研究員の研究支援に力を入れている。

（想定する関係者とその期待）

本研究科は、人文学・社会科学・総合領域の分野に関連する国内外の学界や企業、法人、研究機関等を関係者として想定している。また、国内外の学界等は、本研究科が人文学・社会科学・総合領域の分野の基礎的研究を継続的に遂行し、優れた研究成果を上げることを期待しており、関係する企業、法人、研究機関等は研究成果に基づいた活発な共同研究の推進を期待している。

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

観点　研究活動の状況

（観点に係る状況）

本学部･研究科では、人文学・社会科学・総合領域の分野における様々な研究活動を推進するとともに、国際文化学という新たな研究分野の開発・進化にも積極的に取組み、以下のような実績を上げている。

①論文・著書等の研究実績や学会での研究発表等の状況

本学部・研究科に所属する専任教員 82 人（平成 27 年５月１日現在）が公表した著書・論文数・研究発表数は、《資料２》に示すとおり、平成 22 年度から 27 年度にかけて、毎年ほぼ一定の件数で推移している。ただし、前回の法人評価時と比較すると、調査対象期間平均で、著書数は 51 冊から 58 冊、論文は 129 編から 156 編、国際会議での研究発表は 31 件から 56 件へと着実に増加している。

《資料２：著書・論文等の研究業績数》

年度	著書（単著）	論文（査読付き）	国際会議での研究発表
平成 22 年度	55（12）	148（73）	35
平成 23 年度	56（ 9）	150（64）	46
平成 24 年度	48（ 6）	141（48）	45
平成 25 年度	72（12）	181（62）	54
平成 26 年度	60（11）	166（44）	66
平成 27 年度	57（10）	152（60）	87

②共同研究・受託研究の実施状況

受託研究については、平成 22、24、26 年度に１件ずつ、25 年度に２件、27 年度に３件を実施し、研究費の総額は約 878 万円である。その中には、日本学術振興会からの受託研究が４件含まれている。《資料３》

《資料３：受託研究の実施状況》

年度	受託者	研究代表者	研究題目	研究期間	研究費（千円）
22	芦屋市	藤野 一夫	芦屋市文化振興基本計画策定に関する協力研究	平成 22 年７月～23 年３月	1,300
24	(独)日本学術振興会	定延 利之	しゃべり方の科学－声のしくみを学んで，自分の声を分析・加工してみよう	平成 24 年６月～25 年３月	437
25	(独)日本学術振興会	窪田 幸子	文化人類学研究にかかる学術動向に関する調査研究	平成 25 年４月～26 年３月	1,690
25	(財)住友生命福祉文化財団	藤野 一夫	いずみホール調査評価事業	平成 26 年１月～26 年９月	840
26	(独)日本学術振興会	窪田 幸子	文化人類学研究にかかる学術動向に関する調査研究	平成 26 年４月～27 年３月	1,690
27	(独)日本学術振興会	窪田 幸子	文化人類学研究にかかる学術動向に関する調査研究	平成 27 年４月～28 年３月	1,350
27	Asian Institute of Technology	青山　薫	移民の統合と社会政策の課題：包摂的な創造に向けて，日本，韓国，タイからの考察	平成 27 年９月～28 年１月	975
27	慶熙大学校芸術	板倉 史明	神戸大学大学院国際文化学研究科特別セ	平成 27 年 11 月	500

	デザイン大学		ミナー事業	～28 年１月	

また、本研究科は、内外の第一線の研究者を招聘し、現在の国際社会が直面する問題について研究・討議する国際シンポジウムを毎年秋に開催してきた。当シンポジウムは、国際文化学研究の最先端の研究成果を提示し、かつ新たなパラダイムの構築を目指す研究交流の場であり、その成果を著書等の形で公表している。《資料４》は、平成 22 年度以降の国際シンポジウムのテーマと参加者数、主な成果を示している。

なお、平成 26 年度以降は、国際文化学研究推進センターが中心となって、学際的な新領域の創出を目指す部局内外の研究プロジェクトや海外から第一線の研究者を招聘した講演会、国際シンポジウムや研究会を活発に開催し、研究成果を広く公開している。《資料５》

《資料４：国際シンポジウムのテーマと参加者数》

回	開催年度	テーマ	参加者数	主要成果
第 15 回	平成 22 年	グローバル化と文化多様性のせめぎあい	139 名	第 15 回国際シンポジウム報告書
第 16 回	平成 23 年	東アジアの地平から見た辛亥革命の思想的価値 ――近代化と留学交流の意義	151 名	国際文化学研究［別冊］国際シンポジウム・シリーズⅤ
第 17 回	平成 24 年	『宇宙文化学』の創造力	152 名	
第 18 回	平成 25 年	高等教育における外国語教育の課題と展望 ―― グローバル人材育成への貢献	54 名	

《資料５：国際文化学研究推進センターの活動》

◎講演会・国際セミナー等

平成 26 年度

・7 月 28 日　国際文化学研究推進センター開所式及び記念講演会
　基調講演　アシーム・マハジャン（インド総領事）「日本とインドとの文化交流と今後の学術交流について」
　講演　杉本良男（国立民族学博物館教授）「日本におけるインド研究の現状と今後の学術交流」）
・8 月 8 日　特別講演会
　竹内佐和子（国際交流基金 パリ日本文化会館 館長）「パリ・日本文化の最前線」
・10 月 20 日　第２講演会
　ローザ・カーロリ（カ・フォスカリ大学言語・比較文化学部准教授）「ヴェネツィア『カ・フォスカリ』大学における日本、日本人と日本研究」
・10 月 31 日　第３回講演会
　Elena Istigecheva（トムスク国立制御システム無線電子大学（TUSUR）計算システム学部システム分析・モデリング学科副学科長・教授）・Ayana Aspembitova（シミュレーション・システム分析研究科）「金融時系列データの特徴と分析でみるロシアの文化と経済と西シベリアの学研都市トムスクの紹介」
・11 月 21 日　第 4 講演会「中国と台湾における中日関係・台日関係研究の行方」
　講演１　桑　兵(Sang Bing)「歴史学としての近代中日関係史研究」
　講演２　劉　維開(Liu Weikai)「台湾における蒋介石研究と近代中日関係研究について」
・12 月 15 日　第 5 回講演会

青格力（チンゲル）（中国社会科学院歴史研究所内陸ユーラシア研究センター副主任）「『青海衛拉特聯盟法典』が持つモンゴル伝統法典の特徴について―青海モンゴル史料系統整理の一環として」

平成27年度

・27年4月23日　Promis主催・神戸人類学研究会共催 第1回講演会
ロドルフォ・マジオ（マンチェスター大学）「攻撃の分析ー復讐の呪術と既存の紛争」
・6月1日　第2回講演会
ダニエル・サンシュ（ヌーシャンテル大学教授）「文学における亡霊たち」
・6月18日　第3回講演会
傅鈺雯（台湾国立高雄大学助教授）「台湾におけるポストコロニアル映画」
・8月3日 第4回講演会
ケヴィン・マーフィー（フィラデルフィア科学大学人文学部長）「文化と政府：ニューディール思想の日米両国への影響」
・9月18・19日　国際ワークショップ「移動・移民と摩擦―日本とヨーロッパから見る政治的・文化的境界」（於：ナポリ東洋大学）
・12月2日　第5回講演会
アンドレーア・モゴシュ（バベシュ・ボヨイ大学准教授）、ラードゥ・メーザ（同専任講師「ヨーロッパにおけるジャーナリズムとデジタル・メディア教育の動向」
・28年1月25日　第6回講演会
日下部京子（アジア工科大学准教授）、金斗燮（漢陽大学校教授）、マデリン=ソフィ・アバス（ケンブリッジ大学移住研究ネットワーク研究員）「国境を越える人の移動・多文化化・社会的排除と包摂をめぐる共同研究にむけて（I）」
・2月3日　第二外国語部会（ロシア語）主催、Promis共催講演会
コルネリア・イチン教授（ベオグラード大学）「セルビアの歴史と文化への招待」
・2月5日　第7回講演会
カロリーヌ・タハール准教授（レンヌ第一大学IGR-IAE財団）「サービスセクターにおけるパフォーマンス・マネジメント：管理会計の観点から」
・2月12日　第8回講演会
マルクス・メッスリング（フンボルト大学マルク・ブロッホ研究所副所長）「ヨーロッパ普遍主義と世界の『単調化』」開催。
・2月15日　第9回講演会
向井裕樹（ブラジリア大学日本学科専攻長）「ブラジルにおける日本語教育の変換-日本ブラジル外交関係樹立120周年」
・3月3日、国際研究会「ベルギー研究会ブリュッセル大会」（於：ブリュッセルオフィス）
・3月4日、国際ワークショップ「国際ネットワークを活かした民間話芸調査研究の世界展開」（於：ブリュッセルオフィス）
・3月23日　第10回講演会
ウィリアム・オレイリー（ケンブリッジ大学教授）、パオロ・キャンパナ（同准教授）、カレン・フォーブス（同助教）「国境を越える人の移動・多文化化・社会的排除と包摂をめぐる共同研究にむけて（II）」
・3月26日　神戸大学国際研究力強化事業助成セミナーシリーズ
ウィリアム・オレイリー（ケンブリッジ大学教授）、パオロ・キャンパナ（同准教授）、カレン・フォーブス（同助教）、ほか神戸大学ディスカッサント3名「日英におけるコミュニティ再生のための移住・多文化化・社会保障に関する公共政策研究理論と方法論」
・3月27日　姫路日仏協会主催、Promis及び在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、兵庫県、姫路市、朝来市、兵庫県立大学、姫路商工会議所、フランス観光

開発機構など後援
ピエリック・エベルアール（ジャーナリスト・作家）、白井智子（神戸大学学術研究員）ほか5名「銀の馬車道完成140周年・姫路城グランドオープン1周年記念 日仏バラの祭典―リヨンと結ぶ『銀の馬車道』」

◎研究プロジェクト

平成26年度
・日本研究の文化資源学～国際的連携のもとに
　代表者：寺内 直子
　分担者：池上 裕子、板倉 史明、長 志珠絵、窪田 幸子、昆野 伸幸
・シェンゲン圏の拡大とEU公共圏の社会文化的再構築の諸課題
　代表者：坂井 一成
　分担者：藤野 一夫、青島 陽子、近藤 正基、齋藤 剛、Vladimir Kreck（日欧連携教育府）、林 瑠音（博士課程後期課程）、佐藤 良輔（博士課程後期課程）
・映像におけるタブーと美の相克：暴力・モード・性
　代表者：楯岡 求美
　分担者：朝倉 三枝、石田 圭子、板倉 史明、福岡 麻子、西谷 拓哉
・現代日本における社会的排除の分野横断的研究
　代表者：青山 薫
　分担者：西澤 晃彦、梅屋 潔、小笠原 博毅、小澤 卓也、近藤 正基、青島 陽子
・民間話芸調査研究の電子的・多文化的展開
　代表者：定延 利之
　分担者：林 良子、岩本 和子、楯岡 求美
・コミュニティ創生運動における「文化活動」の役割 －日韓英仏における事例研究－
　代表者：田 恩伊（学術推進研究員）
　分担者：黒川 伊織（協力研究員）、沼田 里衣（協力研究員）、松井 真之介（協力研究員）
・神話研究史における近代「神話学」の特性の解明
　代表者：植 朗子（協力研究員）
　分担者：清川 祥恵（協力研究員）、南郷 晃子（協力研究員）、潘 寧（協力研究員）、馬場 綾香（博士課程後期課程）
・アクティブ・インクルージョンの可能性とその課題 －若年者の「能動的参加」や親密圏の視点からの新しい社会的包摂
　代表者：大村 和正（協力研究員）
　分担者：桶川 泰（協力研究員）、天野 敏昭（協力研究員）
・「異文化誤解」のメディア表象学の構想：他者との「出会いそこない」に着目した領域横断的研究
　代表者：栢木 清吾（協力研究員）
　分担者：山口 隆子（協力研究員）、南郷 晃子（協力研究員）、横山 純（博士課程後期課程）、前川 真裕子（国立民族学博物館外来研究員）
・世紀転換期におけるアングロ・サクソン世界の知識人と社会改革の構想
　代表者：野谷 啓二
　分担者：井上 弘貴、清川 祥恵（協力研究員）、秋田 真吾（博士課程後期課程）

平成27年度
・日本研究の文化資源学
　代表者：寺内 直子
　分担者：池上 裕子、板倉 史明、長 志珠絵、窪田 幸子、昆野 伸幸

・日本における社会的排除の分野横断的研究
　代表者：青山 薫
　分担者：西澤 晃彦、梅屋 潔、小笠原 博毅、小澤 卓也、近藤 正樹、青島 陽子
・新学術領域「調音意味論」提案のための準備的研究
　代表者：定延 利之
　分担者：林 良子、朱 春躍（協力研究者、国際コミュニケーションセンター）
・リゾーム型コミュニティにおける「文化活動」の機能―日韓仏における事例研究
　代表者：松井 真之介（協力研究員）
　分担者：田 恩伊（協力研究員）、黒川 伊織（協力研究員）
・近代「神話学」の発展と「神話」概念拡大の思想的背景の解明
　代表者：植 朗子（協力研究員）
　分担者：清川 祥恵（学術研究員）、南郷 晃子（学術研究員）、潘 寧（協力研究員）、馬場 綾香（博士課程後期課程）
・女性のアクティベーションとケイパビリティに関する研究―生活困窮予備軍の若年女性の社会的包摂のあり方とその課題
　代表者：天野 敏昭（協力研究員）
　分担者：大村 和正（協力研究員）
・「異文化誤解」のメディア表象論
　代表者：栢木 清吾（学術研究員）
　分担者：山口 隆子（協力研究員）、南郷 晃子（学術研究員）、湯 瑾（協力研究員）、横山純（博士課程後期課程）、前川真裕子（三重大学人文学部特任准教授）
・環大西洋の思想交流における社会的なものと信仰的なものとの葛藤と変容
　代表者：井上 弘貴
　分担者：野谷 啓二、清川 祥恵（学術研究員）、秋田 真吾（博士課程後期課程）
・20 世紀前半に於ける芸術文化・思想の異文化間の横断に関する日独共同研究
　代表者：藤野 一夫
　分担者：石田 圭子、池上 裕子、朝倉 三枝、板倉 史明
・災害・環境問題への支援とその課題に関する実践的研究
　代表者：窪田 幸子
　分担者：梅屋 潔、岡田 浩樹、齋藤 剛、貞好 康志、塚原 東吾、吉岡 政徳

③競争的外部資金の獲得状況

研究資金の獲得状況については、まず科学研究費補助金に目を向けると、平成 22 年度から 27 年度の新規申請件数と継続件数を合計した数は、年平均約 62 件となっている。その内、採択件数は、年平均約 40 件であり、申請の約３分の２が採択されている。外部資金獲得増大のインセンティブとなるように、各教員への個人配分研究費の 10%をプールし、そこから科研費等の外部資金に申請した者に再配分するという方式が導入されており、22 年度と 27 年度を比較すると、新規採択数が約３倍、配分額が倍増以上という顕著な増加率を実現している。《「Ⅲ質の向上度の判断　分析項目Ⅰ」参照）

奨学寄附金については、平成 22～24 年度に各２件、25～27 年度に各１件、研究助成金等は平成 23、24 年度に各１件、25 年度に５件、26 年度に４件、27 年度に２件、総額で約３千万円を獲得している。《別添資料１》

（水準）

期待される水準を上回る。

（判断理由）

科学研究費助成事業をはじめ、受託研究、寄附金の受入れなど、多様な外部資金を獲得し、特に科学研究費補助金の配分額は倍増している。これらの研究成果は著書、学術論文等の形

で多数発表されており、その業績数は着実に増加している。これらのことから、本研究科の研究活動は、期待される水準を上回るものであると判断する。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

観点	研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。）

（観点に係る状況）

「研究業績説明書」に示すとおり、本研究科における研究は学術面及び社会、経済、文化面の両面において数々の重要な成果を上げている。以下、代表的な業績について記す。

青山薫編著 *Asian Women and Intimate Work*(2013)は、家事労働、ケア労働、性労働といった人と人との親密な関係にかかわる労働を「親密性の労働」という新たな概念で包括し、アジアで女性によって担われてきたこれらの労働を、グローバル化と移住の時代の中で多角的観点から実証的に捉え直している。2014 年 *CHOICE Award: Outstanding Academic Titles* の一冊に選ばれた。

池上裕子の著書 *The Great Migrator: Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art*(2010)は、アメリカの美術家ラウシェンバーグの 1960 年代における国際的活動を、戦後アメリカ美術が覇権を確立した背景と絡めて検証した論考である。本書は戦後アメリカ美術の動きをトランスナショナルな視点から国際的文脈に位置づけた点で、高い評価を受け、欧米の主要な美術研究誌を含む６カ国の媒体で書評に取り上げられた。

伊藤友美の著書 *Modern Thai Buddhism and Buddhadasa Bhikkhu: A Social History* (2012)は、近現代タイ仏教に思想的革新をもたらした僧侶として高い尊敬を集めるプッタタート比丘(1906-1993)の思想と彼の思想を巡る仏教公共圏における議論について分析している。国内外の学術雑誌において高い学術的価値を高く評価され、平成 25 年 12 月に「第 11 回（2013 年度）東南アジア史学会賞」を受賞した。

山本真也「ヒト・ボノボ・チンパンジーの比較認知科学」は、飼育下のボノボとチンパンジーを対象とした認知心理学実験によってヒトの特性と考えられてきた協力と文化の進化的起源を心理メカニズムの観点から明らかにし、人類進化に影響を及ぼした環境・社会要因を明らかにした。2011 年度日本霊長類学会高島賞及び 2015 年度日本心理学会国際賞奨励賞と分野の異なる学会で受賞するとともに、国内外のメディア等で多数取り上げられた。

（水準）

期待される水準を上回る。

（判断理由）

本研究科では、思想史、心理学、宗教学、政治学、社会学、文化人類学、科学史、認知科学、芸術学、言語学、文学等にわたる幅広い領域において多様な研究活動が行われ、国内外から高い評価を受けている。複数の分野にまたがる学際的、文理融合的研究も活発に行われ、複合的な現代世界の動態を解明する文化研究の進展に大きく貢献している。以上のことから、本研究科の研究成果の状況は期待される水準を上回ると判断する。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　研究活動の状況

事例　研究支援及び外部資金獲得支援体制の整備による研究活動の伸長

前述のとおり、２つのセンターを「国際文化学研究推進センター」に統合することで、財政的資源と人的資源を一元化し、それらを以前にも増して戦略的に活用することができるようになり、組織としての効率性も一層高まっている《別添資料２》。

また、「教員活動評価実施要項」《別添資料３－１》に基づき、「教員活動評価の実施に関する申合せ」《別添資料３－２》を定めて、教員の研究活動について厳密かつ適切に評価することによって、研究活動に対するインセンティブを強化する体制を整えるとともに、外部資金獲得の増大を目指し、各教員への個人配分研究費の 10%をプールし、そこから科研費等の外部資金に申請した者に再配分するという方式を導入した。

これらの体制整備、支援策は確実に成果として実を結んでおり、《資料６》に示すとおり、科学研究費補助金については、22 年度と 27 年度を比較すると、新規申請件数は約 1.8 倍、採択件数は約 1.6 倍、新規採択件数は約３倍、配分額も２倍となっており、顕著な増加率を実現している。

《資料６：科学研究費補助金の採択件数と配分額》

年度	新規申請件数	採択件数	新規採択件数	継続件数	配分額（千円）
平成 22	24	28	6	22	34,100
平成 23	32	35	10	25	35,470
平成 24	39	37	17	20	54,100
平成 25	33	43	14	29	54,600
平成 26	41	50	14	36	63,400
平成 27	44	46	17	29	68,800

論文・著書については、前回の法人評価時と比較すると、調査対象期間平均で、著書数は 51 冊から 58 冊、論文は 129 編から 156 編へと着実に増加している。また、国際文化学研究推進センターが中心となり、学際的な新領域の創出を目指す部局内外の研究プロジェクトや海外から第一線の研究者を招聘した講演会、国際シンポジウムや研究会を活発に開催しており、その結果、調査対象期間平均における国際会議での研究発表が、前回の法人評価時と比較して 31 件から 56 件と飛躍的に増加し、研究成果を広く公開できている（《資料２》及び具体的な活動実績については《資料５》を参照）。

（２）分析項目Ⅱ　研究成果の状況

事例　《移民》《文化》に関する国際的共同研究の推進

本研究科は平成 26 年度より上記「国際文化学研究推進センター」において、各年度、研究プロジェクトを募集し、国際的・先端的な研究を支援するべく人的・財政的資源を集中的に投入している。

この「国際文化学研究推進センター」の研究開発部門が中心となって、本研究科を文化のグローバル化に関する国際的共同研究拠点へと発展させるべく、平成 28 年度日本学術振興会 研究拠点形成事業（Ａ 先端拠点形成型）へ申請を行った。その結果、坂井一成教授を代表とする「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住労働・多文化・福祉政策の研究拠点形成」が採択された（28 年度より５年間、初年度配分額 13,500,000 円）。研究推進センターではこの事業の採択に合わせ、現行の若手研究者育成制度を一層発展させるため、日欧亜の博士後期課程の学生やポスドクを主たる対象として、《次世代セミナー》を定期的に開催し、若手研究者の研究発表及び切磋琢磨の場を設ける取組みを開始した。

また、この申請の準備のために、ナポリ東洋大学、ルーヴェン大学、ツィッタウ/ゲルリ

ッツ大学、ベトナム国家大学ホーチミン市校、マヒドン大学、釜山大学校といったヨーロッパ及びアジアの拠点大学との研究連携を深めたほか、国内でも、東京外国語大学、京都大学、国立民族学博物館、宇都宮大学、富山大学の５つの研究機関を協力機関として組織化することができ、移動・移民に関する国際共同研究の足場を構築した。

その成果の一つとして、平成 27 年９月、ナポリ東洋大学と本研究科との協力により、ナポリ東洋大学において国際ワークショップ「移動・移民と摩擦―日本とヨーロッパから見る政治的・文化的境界」を開催し、本研究科からは６名の教員が研究発表をしたほか、３名が総括コメントと司会を担当した。平成 27 年度も、海外拠点機関にパリ西ナンテール大学(フランス)、国立政治大学(台湾)を加え、本研究科を含め９カ国の拠点大学から成る一層強力な国際的ネットワークを組織している。《資料５》

このようにして、本研究科は、国際移民の爆発的増加という現代世界が直面する焦眉の課題に取り組む国際共同研究のネットワークを築いている。

また、以上と並行して、世界中の海外の研究機関と連携しつつ、例えば《資料７》のようなテーマで国際的《文化》研究のネットワークを構築し、成果を上げている。

さらに、資料７①の共同研究では EU の文化的・社会的な最新の動向を研究テーマとして活発にワークショップを開催し、日欧間の文化交流・政治関係の歴史を踏まえながら、日欧双方向からの文化研究の発信に努めており《資料８》、一連の研究成果は平成 28 年に英語で公刊される予定である。

《資料７：研究ネットワーク構築例》

①ルーヴェン大学、パリ第 10 大学など EU 文化研究の拠点的研究機関の研究者との、EU 文化研究に関する共同研究。
②グローバル化と文化多様性に対応する〈文化政策〉の国際研究（ゲルリッツ大学、ヒルデスハイム大学）
③戦後美術史に関する国際的研究活動（ニューヨーク州立大学、アジア美術アーカイヴ）
④セックスワークをめぐるジェンダー／セクシュアリティ／人の移動の実証研究（香港大学）

《資料８：ブリュッセル日欧ワークショップ　テーマ・パネリスト一覧》

第１回ブリュッセル日欧ワークショップ

「ヨーロッパ統合の基層における文化の役割」（2011 年 3 月，於・ブリュッセル自由大学）

１）ジル・フェラギュ（パリ西ナンテール・ラデファンス大学＜＝パリ第 10 大学＞）「ヨーロッパ統合の基層におけるキリスト教」
２）イザベル・ムレ（ブリュッセル自由大学）「ヨーロッパにおける文学ジャーナリズム」
３）寺尾智史（神戸大学国際文化学研究科）「移動の自由と文化多様性の保全～属地か属人か」
４）ヘルムート・エバーハート（グラーツ大学）「巡礼現象と無形文化遺産に見るヨーロッパの深層」

第２回ブリュッセル日欧ワークショップ

「日欧関係の歴史・文化・政治～日欧間の文化交流と政治関係をめぐって」（2012 年 3 月，於・神戸大学ブリュッセルオフィス）

１）ヴィリー・ヴァンデ-ヴァーレ（ルーヴェン大学）「日欧文化政治交流史」
２）ユク・ロペス-ビダル（カタロニア放送大学）「現代日 EU 関係」
３）ノエミ・ランナ（ナポリ東洋大学）「日欧の中東・北アフリカ地域政策の比較研究」

第 3 回ブリュッセル日欧ワークショップ
「政治・経済・社会の劇変と EU におけるアイデンティティ形成」（2013 年 2 月，於・ブリュッセル自由大学）
1）コルヤ・ラウベ（ルーヴァンカトリック大学）「危機から統合へ？　ヨーロッパの多様性，アイデンティティ，トランスナショナリズム，制度変革」
2）齋藤剛（神戸大学国際文化学研究科）「北アフリカの政治変動とヨーロッパへの波及」
3）村尾元（神戸大学国際文化学研究科）「ソーシャルメディアとヨーロッパのアイデンティティ」
4）Noemi Lanna（ナポリ東洋大学）「いかなる危機か？　日本・EU と北アフリカの政治変動」

第 4 回ブリュッセル日欧ワークショップ
「EU アイデンティティの構築とその政治的意義～EU における『政治と文化の接合』」（2014 年 3 月、於・ブリュッセル自由大学）
1）フランソワ・フォレ（ブリュッセル自由大学）「EU 統合の社会文化的側面のもつ政治性」
2）坂井一成（神戸大学国際文化学研究科）「EU の内と外における他者との共生」
3）村尾元（神戸大学国際文化学研究科）「SNS を通じた EU アイデンティティの形象化」
4）フアン・ディエス-メドラーノ（マドリード・カルロス 3 世大学）「EU アイデンティティの政治化」

正誤表　学部・研究科等の現況調査表（研究）

神戸大学国際文化学部・国際文化学研究科

	頁数・行数等	誤	正
1	2-8 頁・3 行目	近藤　正樹	近藤　正基